

# PAT により測定された新入園児の 愛情のネットワーク

Relationships between Attachment and Love Networks of 3-year-old Kindergartners  
using the Picture Attachment Test (PAT)

天野菜穂子\*

宮本正一\*\*

Naoko AMANO\*

Masakazu MIYAMOTO\*\*

The purpose of the present study was to examine the relationship between attachment and love networks of 3-year-old kindergartners using the Picture Attachment Test (PAT). Fifty-two children were asked to respond whom they want to be with them in 7 kinds of P-F Study-type card situations that depict general family scenes. The young children were classified into 4 groups: mother-attached, family member-attached, mother and peer-attached, and peer-attached. These results were examined and discussed in several cases.

Key words: attachment, love-network, Picture Attachment Test

キーワード: 愛着, 愛情のネットワーク, PAT

人は、様々な人と心を通わせ、誰かに必要とされ、愛情を交換しながら、心理的および実的に支えられて暮らしている。高橋（1990）はこのような「いく人かの親しい人からなる関係のまとまり」を「愛情のネットワーク」と呼んで研究にしている。

高橋（1990）は、Kahn & Antonucci の研究から、人が親しい人に支えられ、またこちらからも支えながら暮らしていることを図1のようなモデルで表し、人のまわりをたくさんの人々が護衛艦のように取り巻いて存在するとした。図の中心にいるのが本人で、内側の円には彼または彼女が最も身近に感じ、好きで大切な人々がいる。次の円には、最初の円ほどではないが大切な人々が、外の円にはさらに重要度は減るが、やはり親しく大切な人々がいると述べている。

ここでこの愛情のネットワークを、赤ちゃん時代から幼

児期にさかのぼって検討してみる。

特定の人だけにしか有効ではなく、しかも要求がすぐに満足されねばならない赤ちゃん時代の愛着が、1歳、2歳となるに従って、家族や仲間にも広がりを持っていく。高橋（1995）は、24ヶ月児をもつ母親にPAT（Picture Attachment Test、以後PATと表す）を実施した結果、日常場面では一緒にいるだけでうれしく安心なのは母親であるが、遊びの相手としては家の中ではきょうだいが、戸外では友

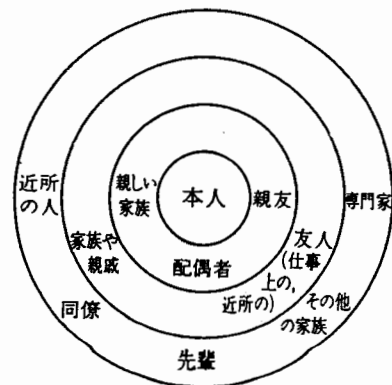


図1 愛情のネットワーク（高橋，1990）

\* 岐阜県立岐阜病院小児科  
Pediatrics, Gifu-Prefectural Hospital, 4-6-2 Noishiki,  
Gifu-City, Gifu 500-8226

\*\* 岐阜大学教育学部学校教育講座（心理学）  
Department of Psychology, Faculty of Education,  
Gifu University, Yanagido, Gifu 501-1193

達が、母親より好まれており、お風呂に入る相手としてかなりの子どもが父親を選んでいるという具合に、24ヶ月児はすでにいろいろな場面に応じていろいろな人を必要とし始めていることがわかったと述べている。

こうして家族や仲間との間でできあがった対人関係は幼稚園への入園を境にどのような変化をしていくのであろうか。

天野・宮本(1998)はこのような対人関係の広がりを観察している。その中でいくつかの興味深い新入園児の行動を観察した。遊びの約束をすることによって自分のもつ空間が拡がり仲間関係を広げたK君。彼にとって自分の家に友達を招いたり、友達の家を訪れていくことは今まで自分の経験したことのない新しい喜びの発見であった。また水が顔にかかることが嫌でたまらなかったが、たまたま彼の仲間が水遊びの大好きな子であったために、彼と一緒にいることでプール遊びに対する不安を乗り越えていったN君。そのほか、先生を代理母のようにして、先生と密着することによって、安心感を得て、先生を介しながら仲間と遊ぶことのおもしろさやトラブルの処理の仕方を少しずつ学んでいった数人の子ども達。この子ども達の対人関係は仲間や先生という入園後に出会った人達を抜きにしては語れないだろう。

そこで本研究においては、PATを用いて子ども達の対人関係を調査することによって、子ども達の愛着がどのような対象にどのような場面でどの程度強く向けられているかを知り、そしてそれが子ども達の幼稚園における行動とどのように関連しているかを見ていくことを目的とする。

まず高橋(1978)の対人関係の理論を背景に、高橋がPATを考案していく過程を述べる。

人が社会を形成し、人々に囲まれて生活していく現実からすれば、我々の対人関係は単なる二者関係の総和ではない。乳児といえどもそれは例外ではない。我々は多くの人々と接触していて、母親、父親、仲間などはその中の一員であり、当人と相手との関係は、他の相手との関係と関連している。そこで社会の中で暮らしているという事実を記述するための対人関係に関する理論的モデルの構築を考える。

高橋(1973)は対人関係の中核といってよい愛着を中心にして、愛着の発達の変容を考えるために、まず発達が一応の最終状態に至っていると思われる大学生の愛着を調査した。調査は、四つの属性を用いて、対人関係の中核部分である愛着を記述するためになされた。何回かの予備調査の結果、大学生が愛着行動の対象として選ぶことの多かった6人の対象(母親、父親、きょうだい、同性の友人、異性の友人で最も好きな人、尊敬する人)を同時に取り上げ(属性1:愛着行動の向けられる対象)、それぞれの対象が

精神生活の上でどのような機能を持ち(属性2:愛着の対象のもつ機能)、さらにそれぞれの対象に具体的にどのような愛着行動を用いて(属性3:愛着要求を表現する行動の様式)、どの程度の強さで要求を表現しているか(属性4:個々の対象に愛着行動を向ける強度あるいは頻度)を質問紙で測定した。

その結果、大学生では男女を問わず、愛着構造と呼ぶにふさわしい枠組みが想定された。6人の対象が自己の精神生活において果たす機能が区別され、個人の存在を支えるという機能をもつ中核的な単数又は少数の焦点と名付けた対象、そして焦点ほどではないが重要度の少ない対象という具合に、順序づけられていた。これは、焦点を中心とした愛着の対象が互いに分化して位置づけられた、よくできあがった構造というべきものと思われた。そして、それぞれの対象に、本人にとってふさわしい行動の様式を用いて、ある強さの愛着行動を向けると報告した。そうすると一人一人が、この自分の枠組みを形成していく過程が、対人関係の発達の過程だということになる。例えば乳児期においても母—子関係だけを問題にしているとは不十分で、やがて枠組みが他の対象へと拡大していくことを考えれば、その萌芽があるか否か、あるいは、母—子関係でも、その次の発達変容を促す質のものがどうか重要な視点となるはずである。

対人関係の枠組みの発達という視点からは、次の四つの重要な時期があると考えられた(ボウルビィ, 1982; 1993)。

第一は、対人関係そのものが出現する乳児期、第二は、初めの対人行動の相手から他の対象へと対人関係の拡大をしはじめる2歳前後、第三は、社会的に対人関係の拡大が強く要求される入園、入学期、そして第四は、主体としての自己が、対人関係の再体制化に強くかかわる青年期である。

乳児期は、相手が特定の一人あるいはごく少数の愛着対象という対人関係の原型をつくる時期である。1歳後半くらいからの幼児期においては、新しい対人行動の相手を求め始める時期で、このとき乳児期につくった対人関係の原型である特定の愛着の対象が、「人間とはいいいものだ」という人間への肯定的な姿勢を子どもの中で育むように機能している。特定の愛着の対象とよく似ているが少し違う対象に、子どもは最も自分の安全を脅かされぬやり方で対人行動を向けて試していきつつ、対象の拡大をはかっていく。そして子どもは幼稚園への入園の時期を迎える。公的な機関にはいると、外からかなり強く、しかも急激に対人行動の変容を、いわば社会化を迫られるといえる。入園を境に、新しく仲間という対人関係の対象が出現し、その重要性は成長につれて増大していく。

そこで、この時期、幼児から小学6年生までの愛着を測るために開発されたのがPAT (Picture Attachment Test) である。子どもが愛着行動を示すと予想される場面を図版で示し、そのような場面でどういう対象を望むかを聞く。これによって、幼児から小学6年生までの愛着が、どのような対象に、どのような場面で、どの程度強く向けられているかを調べることができる。まだ言語的活動が未発達な幼児には調査が不可能なので、彼らをよく知る母親に回答してもらう。

子どもが対人関係の枠組みに仲間という対象を加えていくやり方は、次のように考えられる。はじめに自分の持っていた対人関係の枠組みの中で最も表層的で、新しい対象にそのことを任せて万一失敗してもたいして自分が傷つかない領域にまず新しい対象を受け入れ、やがて同じ機能を果たすならば、よりよくそのことを果たす対象を求めるという原則に従って、新しい対象をより重要な位置に取り入れるといった仕方です対人関係の枠組みを調節し、変化させるということが予想される。

このようなことを行っただけ、青年期における対人関係の再体制化の時期を迎え、先の研究の大学生に対する調査でわかってきた対人関係の構造を形成していくものと考えられる。

## 方 法

### 被験者

1997年4月に岐阜県内において新入園した、A幼稚園101児から118児までの18名、B幼稚園201児から234児までの34名、計52名である。

### 実験期日および場所

1997年6月。子ども達の所属する組の教室。

### 手続き

ここで用いるPATは、詳しくはPAT-YC (young child) といい、1～6歳児用である。1～3歳児に対しては子どもの日常を最もよく知る人に面接して資料を集める。3～6歳児に対しては個別に面接をしてたずねるもので、本研究の被験者である子ども達は、個別に面接ができるぎりぎりの年齢段階にあたる。

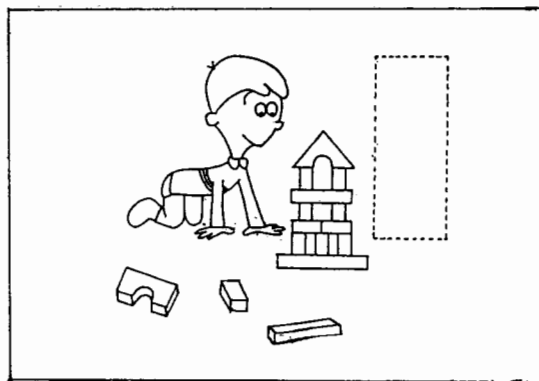
PATの内容は、子どもが対人関係を示しそうな15場面を15枚の図版を用いて調べるものであり、男の子用、女の子用があって性別によって使い分ける。

3歳児がこの検査の可能な最低の年齢であることから、検査時間を考慮して図版を半分に減らして、3歳児にとって最も日常的であると思われる7場面を選択した。それらの場面を図2に示す(男の子用)。

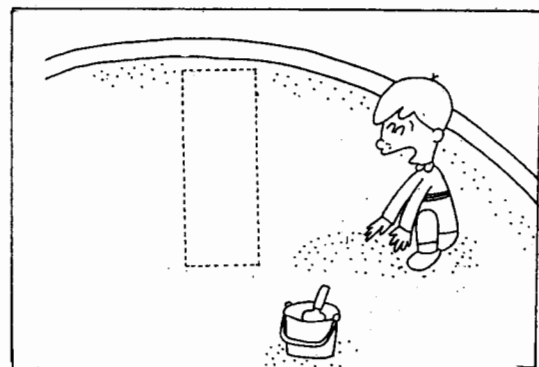
それでは以下に子ども達に直面したときの実験の手順を

述べる。

- ① まず家族や友達、先生の描いてある図版を示しながら家族構成を尋ねて、家族の人形の絵を示していく。さらに同居はしていないが親しい人達についてふれて、子どもの周りにいろいろな人がいることを気づかせていく。筆者はあらかじめ家族構成やその子が親しくしている子ども達を把握しておき、親しいであろう人に気づくことができない場合は、援助していく。「今日は誰といっしょに幼稚園にきたの」「おじいちゃんだよ」「そうか、Aちゃんのおうちにはおじいちゃんがいるんだね」「うん」と



図版 1



図版 2

図2 PAT

いう具合である。

- ② 「これからたくさんの絵を見せますから、いろいろな人を思い出しながら、答えてください」と教示する。
- ③ 1枚目の図版を見せ、「ここに描いてある子を、○ちゃん（自分）のことだと思って答えてください」と言う。下記の実験教示によって1の場面を説明し、図の点線部分に誰が最も来てほしいかをきく。
- ④ 2枚目、3枚目……と続けていく。

実験教示（○ちゃんのところに、被験者の名前を入れてきく）とともに、1場面から7場面まで図版の内容を以下に示す。

1場面 「○ちゃんが家の中で遊ぶとき、誰と最もいっ

しょに遊びたいですか？」

2場面 「○ちゃんが幼稚園のお砂場で遊ぶとき、誰と最もいっしょに遊びたいですか。」

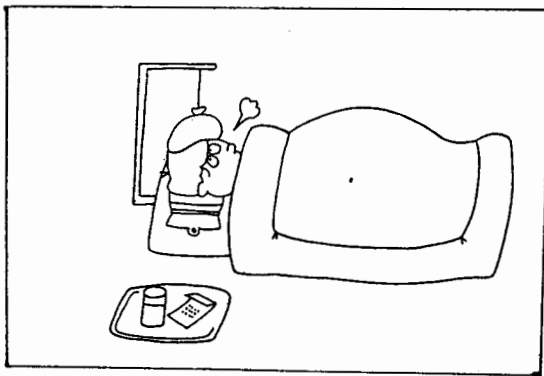
3場面 「○ちゃんが病気で熱が高く出たとき、誰に最も一緒にいてほしいですか。」

4場面 「○ちゃんが幼稚園で折り紙を折っていて、途中でわからなくなったとき、誰に最も教えてほしいですか。」

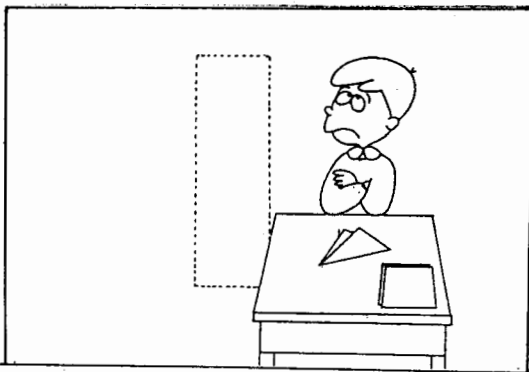
5場面 「○ちゃんがプレゼントをもらったとき、誰といっしょにプレゼントをみたいですか。」

6場面 「○ちゃんがお風呂にはいるとき、誰と最もいっしょには入りたいですか。」

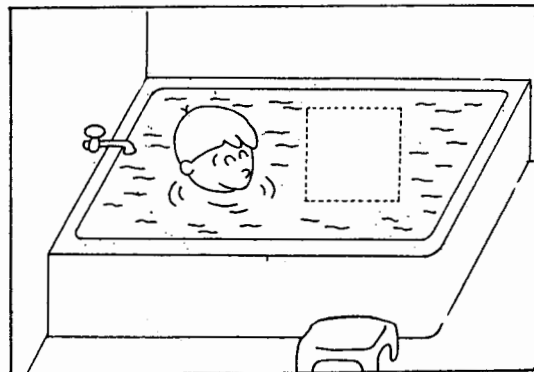
7場面 「○ちゃんが上手に絵を描いたとき、誰に最も見せたいですか。」



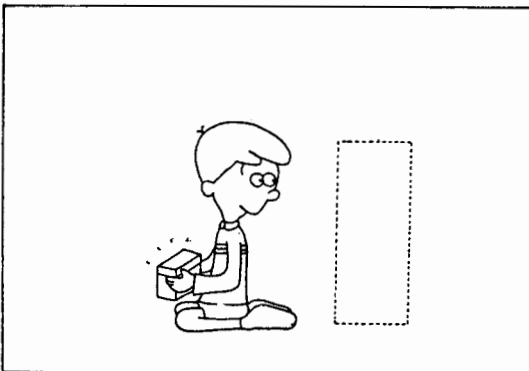
図版 3



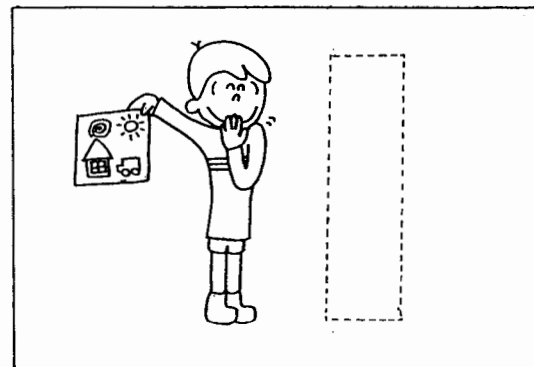
図版 4



図版 6



図版 5



図版 7

図2（続き） PAT

## 結 果

7つの場面において誰が選択されたかをまとめたのが表1である。数字は選択した人物を示していて、1－父親、2－母親、3－兄姉、4－弟妹、5－祖父母、6－同じ組の友達、7－同じ組以外の友達、8－先生、9－それ以外の人である。なお0は子どもがその図版において誰も選択せず答えなかったことを表す。10は、子どもが誰も同伴者を求めず、自分一人でその図版の表す事態にあたることを主張した場合で、子どものそのときの応答で「一人のできるもん」と表すこととした。

最後の項目は愛着の「型」とし、これは7場面において4度以上同じ対象をあげたとき、その対象を中心としたタイプとするという基準で、母親型を1、父親型を2、きょうだい型を3、家族型を4、仲間型を5とし、対象を選択しなかった図版が半数以上でタイプを判断できなかった型を0、どの一つの対象も4度以上を上回ることのなかったタイプを拡散型6とした。また家族の誰か一人が図版の半分以上を占めているタイプを家族型とする。

図版の半分以上を占めた対象を中心の対象と見なしたときの愛着の型は、母親型20名、父親型4名、きょうだい型2名、家族型13名、仲間型5名、その他が8名となった。

表1 7場面で選択された対象人物

| 被験者 | 性別 | 家で遊ぶ | 砂場  | 病気   | 折り紙 | プレゼント | お風呂 | 絵   | 型 |
|-----|----|------|-----|------|-----|-------|-----|-----|---|
| 101 | 1  | 4    | 3   | 2    | 0   | 2     | 2   | 2   | 1 |
| 102 | 1  | 12   | 6   | 12   | 1   | 1     | 2   | 12  | 4 |
| 103 | 0  | 3    | 67  | 2    | 2   | 8     | 123 | 2   | 1 |
| 104 | 0  | 1    | 1   | 2    | 1   | 2     | 1   | 6   | 2 |
| 105 | 1  | 2    | 0   | 2    | 2   | 2     | 2   | 2   | 1 |
| 106 | 1  | 2    | 2   | 2    | 2   | 2     | 1   | 2   | 1 |
| 107 | 0  | 4    | 8   | 12   | 8   | 2     | 1   | 8   | 4 |
| 108 | 0  | 67   | 67  | 2    | 67  | 67    | 2   | 67  | 5 |
| 109 | 0  | 3    | 3   | 2    | 7   | 2     | 23  | 2   | 1 |
| 110 | 0  | 3    | 7   | 2    | 7   | 3     | 1   | 6   | 4 |
| 111 | 0  | 3    | 3   | 3    | 3   | 3     | 1   | 2   | 3 |
| 112 | 1  | 10   | 6   | 45   | 10  | 1     | 14  | 1   | 4 |
| 113 | 0  | 3    | 3   | 2    | 2   | 0     | 2   | 2   | 1 |
| 114 | 0  | 10   | 6   | 2    | 6   | 2     | 2   | 2   | 1 |
| 115 | 1  | 0    | 0   | 0    | 0   | 0     | 2   | 0   | 0 |
| 116 | 1  | 0    | 0   | 0    | 0   | 0     | 2   | 0   | 0 |
| 117 | 1  | 2    | 6   | 2    | 2   | 2     | 15  | 2   | 1 |
| 118 | 1  | 2    | 6   | 2    | 6   | 2     | 2   | 2   | 1 |
| 201 | 0  | 6    | 6   | 2    | 8   | 0     | 12  | 0   | 6 |
| 202 | 0  | 7    | 6   | 1    | 1   | 1     | 1   | 2   | 2 |
| 203 | 0  | 1    | 8   | 2    | 5   | 2     | 12  | 26  | 1 |
| 204 | 0  | 0    | 0   | 1239 | 0   | 0     | 123 | 2   | 1 |
| 205 | 0  | 3    | 3   | 3    | 2   | 3     | 23  | 123 | 3 |
| 206 | 0  | 14   | 6   | 2    | 7   | 2     | 125 | 6   | 4 |
| 207 | 0  | 1    | 6   | 2    | 1   | 2     | 2   | 2   | 1 |
| 208 | 0  | 2    | 10  | 2    | 1   | 1     | 125 | 2   | 1 |
| 209 | 0  | 9    | 8   | 5    | 9   | 5     | 1   | 5   | 4 |
| 210 | 0  | 4    | 6   | 2    | 6   | 2     | 1   | 12  | 4 |
| 211 | 0  | 0    | 0   | 0    | 0   | 0     | 0   | 0   | 0 |
| 212 | 0  | 23   | 7   | 2    | 3   | 2     | 1   | 2   | 1 |
| 213 | 0  | 6    | 6   | 6    | 10  | 6     | 6   | 6   | 5 |
| 214 | 0  | 2    | 1   | 129  | 0   | 0     | 0   | 0   | 0 |
| 215 | 0  | 6    | 6   | 0    | 0   | 0     | 12  | 0   | 0 |
| 216 | 0  | 12   | 12  | 12   | 1   | 2     | 12  | 12  | 4 |
| 217 | 0  | 6    | 6   | 6    | 6   | 6     | 1   | 6   | 5 |
| 218 | 0  | 6    | 6   | 2    | 2   | 2     | 1   | 12  | 1 |
| 219 | 0  | 3    | 3   | 2    | 1   | 2     | 1   | 1   | 4 |
| 220 | 0  | 2    | 2   | 2    | 1   | 2     | 1   | 2   | 1 |
| 221 | 0  | 6    | 6   | 2    | 1   | 1     | 3   | 1   | 4 |
| 222 | 0  | 0    | 0   | 0    | 0   | 0     | 0   | 0   | 0 |
| 223 | 1  | 2    | 6   | 2    | 8   | 2     | 2   | 8   | 1 |
| 224 | 1  | 3    | 3   | 2    | 3   | 3     | 5   | 2   | 4 |
| 225 | 1  | 3    | 8   | 2    | 3   | 3     | 1   | 2   | 4 |
| 226 | 1  | 125  | 125 | 125  | 1   | 15    | 1   | 15  | 2 |
| 227 | 1  | 7    | 6   | 2    | 2   | 2     | 2   | 2   | 1 |
| 228 | 1  | 3    | 2   | 2    | 1   | 2     | 3   | 2   | 1 |
| 229 | 1  | 6    | 6   | 6    | 6   | 2     | 5   | 6   | 5 |
| 230 | 1  | 10   | 10  | 10   | 10  | 0     | 2   | 0   | 7 |
| 231 | 1  | 2    | 6   | 1    | 6   | 1     | 1   | 1   | 2 |
| 232 | 1  | 3    | 6   | 2    | 6   | 6     | 13  | 6   | 5 |
| 233 | 1  | 3    | 6   | 23   | 3   | 3     | 2   | 6   | 4 |
| 234 | 1  | 10   | 10  | 2    | 10  | 2     | 2   | 2   | 1 |

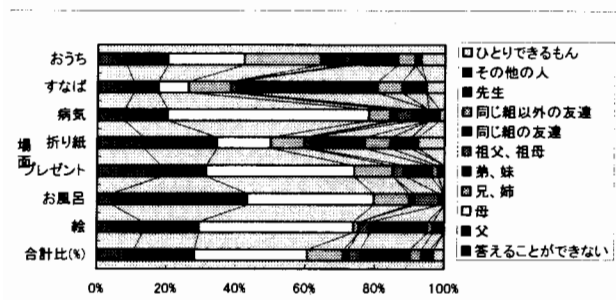


図3 7つの場面で選択された対象

各場面において誰が選ばれたかを、表1における1から10の対象について示したものが図3である。また選ばれた対象毎に図版の数を集計したのが表2である。

乳児にとって、対人関係の対象として最も重要な人物は母親である。しかし、高橋(1983)も述べている通り、対人関係の対象として、新しい対象が重要になってくれば、すでに子どもが持っている枠組みの変容が必要となってくる。3歳児の対人関係において、この変容は徐々に進行していると考えられ、母親の持っていた機能のあるものが他の対象にとって代わられ、同時に、母親の機能が改めて明

表2 愛情対象毎の選ばれた図版の数

| NO  | 答えることができない | 父 | 母 | 兄姉 | 弟妹 | 祖父祖母 | 同じ組の友達 | 同じ組以外の友達 | 先生 | その他の人 | ひとりでできるもん | タイプ |
|-----|------------|---|---|----|----|------|--------|----------|----|-------|-----------|-----|
| 101 | 1          | 0 | 4 | 1  | 1  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 102 | 0          | 5 | 4 | 0  | 0  | 0    | 1      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 103 | 0          | 1 | 4 | 2  | 0  | 0    | 1      | 1        | 1  | 0     | 0         | 2   |
| 104 | 0          | 4 | 2 | 0  | 0  | 0    | 1      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 105 | 1          | 0 | 6 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 106 | 0          | 1 | 6 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 107 | 0          | 2 | 2 | 0  | 1  | 0    | 0      | 0        | 3  | 0     | 0         | 2   |
| 108 | 0          | 0 | 2 | 0  | 0  | 0    | 5      | 5        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 109 | 0          | 0 | 4 | 3  | 0  | 0    | 0      | 1        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 110 | 0          | 1 | 1 | 2  | 0  | 0    | 1      | 2        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 111 | 0          | 1 | 1 | 5  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 3   |
| 112 | 0          | 3 | 0 | 0  | 2  | 1    | 1      | 0        | 0  | 0     | 2         | 4   |
| 113 | 1          | 0 | 4 | 2  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 114 | 0          | 0 | 4 | 0  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 1         | 2   |
| 115 | 6          | 0 | 1 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 0   |
| 116 | 6          | 0 | 1 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 0   |
| 117 | 0          | 1 | 5 | 0  | 0  | 1    | 1      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 118 | 0          | 0 | 5 | 0  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 201 | 2          | 1 | 2 | 0  | 0  | 0    | 2      | 0        | 1  | 0     | 0         | 2   |
| 202 | 0          | 4 | 1 | 0  | 0  | 0    | 1      | 1        | 0  | 0     | 0         | 4   |
| 203 | 0          | 2 | 4 | 0  | 0  | 1    | 1      | 0        | 1  | 0     | 0         | 2   |
| 204 | 4          | 2 | 3 | 2  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 1     | 0         | 1   |
| 205 | 0          | 1 | 3 | 6  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 3   |
| 206 | 0          | 2 | 3 | 0  | 1  | 1    | 2      | 1        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 207 | 0          | 2 | 4 | 0  | 0  | 0    | 1      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 208 | 0          | 3 | 4 | 0  | 0  | 1    | 0      | 0        | 0  | 0     | 1         | 1   |
| 209 | 0          | 1 | 0 | 0  | 0  | 3    | 0      | 0        | 1  | 2     | 0         | 4   |
| 210 | 0          | 2 | 3 | 0  | 1  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 211 | 7          | 0 | 0 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 0   |
| 212 | 0          | 1 | 4 | 2  | 0  | 0    | 0      | 1        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 213 | 0          | 0 | 0 | 0  | 0  | 0    | 6      | 0        | 0  | 0     | 1         | 4   |
| 214 | 4          | 2 | 2 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 1     | 0         | 0   |
| 215 | 4          | 1 | 1 | 0  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 0   |
| 216 | 0          | 6 | 6 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 217 | 0          | 1 | 0 | 0  | 0  | 0    | 6      | 0        | 0  | 0     | 0         | 4   |
| 218 | 0          | 2 | 4 | 0  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 219 | 0          | 3 | 2 | 2  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 220 | 0          | 2 | 5 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 221 | 0          | 3 | 1 | 1  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 222 | 7          | 0 | 0 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 0   |
| 223 | 0          | 0 | 4 | 0  | 0  | 0    | 1      | 0        | 2  | 0     | 0         | 2   |
| 224 | 0          | 0 | 2 | 4  | 0  | 1    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 225 | 0          | 1 | 2 | 3  | 0  | 0    | 0      | 0        | 1  | 0     | 0         | 2   |
| 226 | 0          | 7 | 3 | 0  | 0  | 5    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 227 | 0          | 0 | 5 | 0  | 0  | 0    | 1      | 1        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 228 | 0          | 1 | 4 | 2  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 0         | 1   |
| 229 | 0          | 0 | 1 | 0  | 0  | 1    | 5      | 0        | 0  | 0     | 0         | 4   |
| 230 | 2          | 0 | 1 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 4         | 3   |
| 231 | 0          | 4 | 1 | 0  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 4   |
| 232 | 0          | 1 | 1 | 2  | 0  | 0    | 4      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 233 | 0          | 0 | 2 | 4  | 0  | 0    | 2      | 0        | 0  | 0     | 0         | 2   |
| 234 | 0          | 0 | 4 | 0  | 0  | 0    | 0      | 0        | 0  | 0     | 3         | 1   |

確になるという変容が起こるはずである。その中で、子どもが病気で心細く思うとき、母親の存在というのは、安心感をもたらす最も重要な働きをするものであり、3歳児にとって、母親の代わりには誰もなり得ないと考えられる。そこで病気の時に母親を選択するかどうかには焦点を当てた。

表2の最後の項目でタイプ分けを行っている。これはまず、家族以外の対象の選択がないタイプを家族型、家族以外の対象の選択がある場合を仲間型とする。次に、病気の時一緒にいてほしい人として母親の選択の有無についてクロス集計を行い、2×2でできた4つのセルをそれぞれ家族型で病気の時母親を選択した「家族母型タイプ1」、仲間型で病気の時母親を選択した「仲間発展型タイプ2」、家族型で病気の時母を選択しなかった「家族その他型タイプ3」、仲間型で病気の時母親を選択しなかった「仲間ドーナツ型タイプ4」と命名し示した(表3)。

タイプ1を母親型(7場面で母親を4度以上選択したタイプ)か母親型でないかでさらにタイプ1-1タイプ1-2、タイプ2を母親型か母親型でないかでタイプ2-1タイプ2-2、タイプ3できょうだいを選択したタイプ3-1、タイプ3で自分を選択したタイプ3-2、タイプ4で家族の選択の有無でタイプ4-1タイプ4-2に細分した。そして各タイプにおいて愛着対象の拡がりの様子を愛情のネットワーク(高橋1990)と名付け、図4～図11に示した。

タイプ1-1(図4)のネットワークは、焦点に母親がいてその存在が強く、その周辺に家族が散らばっている。タイプ1-2(図5)のネットワークの焦点には母親がいるのだが、父親、父母、きょうだいとも密接に関わっている。しかしタイプ1-1、タイプ1-2共に、仲間関係に

は拡がっていない。

タイプ2-1(図6)のネットワークは、焦点に母親がいてその存在が強く、その周辺に家族や仲間が散らばっている。

タイプ2-2(図7)のネットワークの焦点には母親がいるのだが、家族との関わりも密接で、一番外側に仲間関係が拡がっている。

タイプ3-1(図8)のネットワークは、自分に最も近いはずである母親の存在がなく、その周囲の兄や姉との関係が強く存在するが、仲間関係には拡がっていない。タイプ3-2(図9)のネットワークは、自分の周辺には、近くにも遠くにも誰もいない。

タイプ4-1(図10)のネットワークは、自分に最も近い母親の存在はないが、父親や家族との関わりは密接であり、その周辺に仲間関係が拡がっている。タイプ4-2(図11)のネットワークは、自分の周囲には、母親も家族もいない。一番外側に仲間関係が拡がっている。

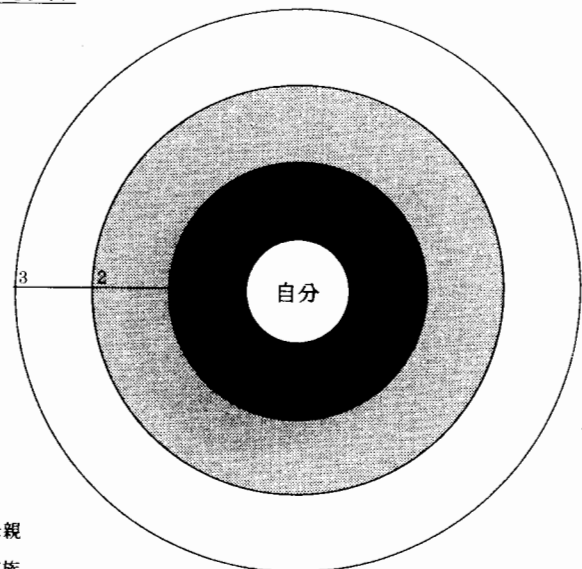
ところで我々(天野・宮本, 1998)は、PATを実施するに平行して、被験者の性別、誕生月、兄弟順位を調査した。また毎日の子どもと親との分離不安の状態や園での生活の様子を観察した。そして、幼稚園に子どもを迎えに来た母親に子どもが再会したときの子どもの様子、子ども達

表3 愛情のネットワークのタイプ  
(数値は被験者番号)

|                           | 家 族 型                                                                                  | 仲 間 型                                                                                                                                              |
|---------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 病気の時、<br>母親にそば<br>に居て欲しい  | 101, 105, 106, 113,<br>204,<br>208, 216, 219, 220,<br>224,<br>226, 228, 234<br>(家族母型1) | 102, 103, 104, 107,<br>108, 109,<br>110, 114, 117, 118,<br>201, 203,<br>206, 207, 210, 212,<br>218, 221,<br>223, 225, 227, 232,<br>233<br>(仲間発展型2) |
| 病気の時、<br>母親以外の<br>人に居て欲しい | 111, 205, 230<br>(家族その他型3)                                                             | 112, 202, 209, 213,<br>217, 229,<br>231<br>(仲間ドーナツ型4)                                                                                              |

—1タイプ

NO.101.105.106.113.  
208.220.228.234



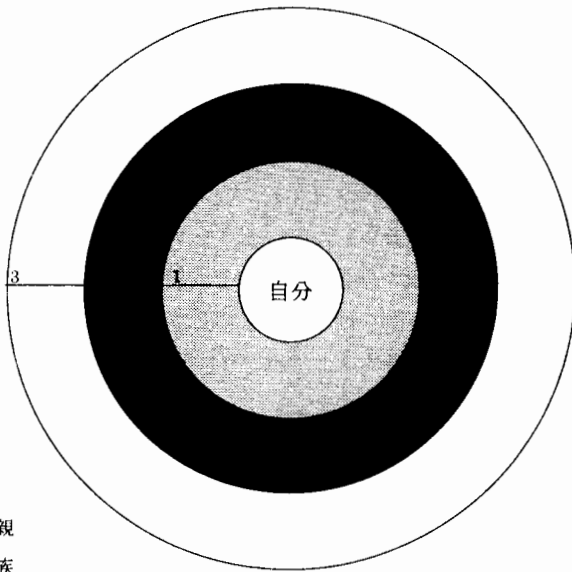
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間(先生)

家族以外に人間関係が拡がっていない。  
母を4度以上選択している。  
病気場面で母を選択している。

図4 愛情のネットワークのタイプ1-1

1タイプ

NO. 216, 219, 224, 226



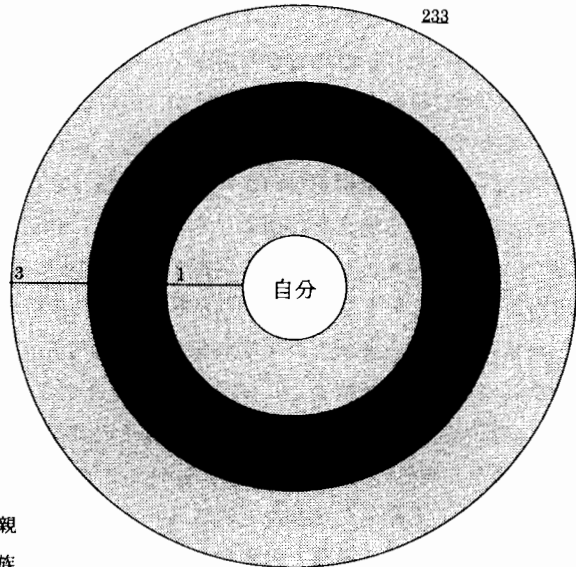
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間 (先生)

家族以外に人間関係が広がっていない。  
母以外に父、祖父母、きょうだいと4度以上関わる。  
病気場面で母を選択している。

図5 愛情のネットワークのタイプ1-2

2タイプ

NO. 102, 104, 107, 108, 110  
201, 206, 210, 221, 225, 232,  
233



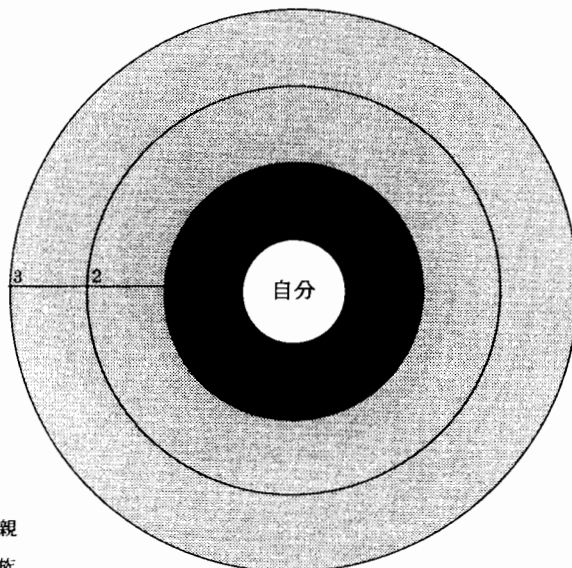
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間 (先生)

家族以外に人間関係が広がっている。  
母以外に父、祖父母、きょうだいとよくかわる。  
病気場面では母を選択している。

図7 愛情のネットワークのタイプ2-2

2タイプ

NO. 103, 109, 114, 117, 118  
203, 207, 212, 218, 223, 227



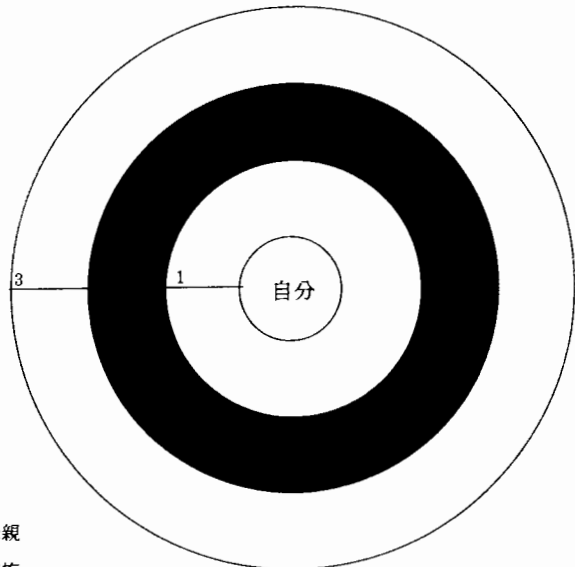
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間 (先生)

家族以外に人間関係が広がっている。  
母を4度以上選択している。  
病気場面で母を選択している

図6 愛情のネットワークのタイプ2-1

3タイプ

NO. 111, 205



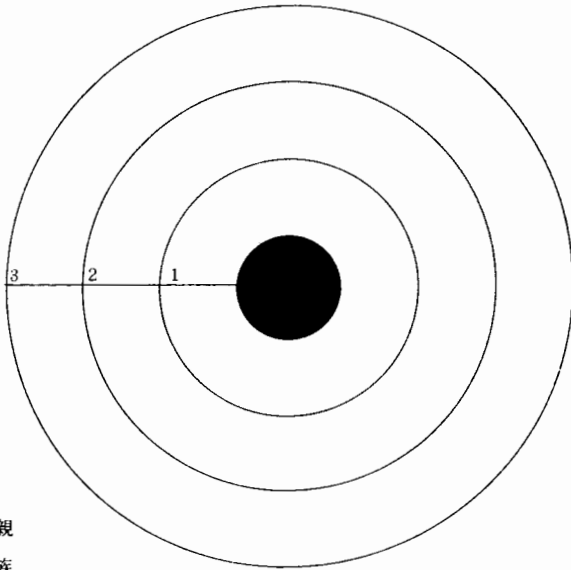
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間 (先生)

家族以外に人間関係が広がっていない。  
兄、姉と4度以上かわる。  
病気場面では兄、姉を選択している。

図8 愛情のネットワークのタイプ3-1

3タイプ

NO. 230



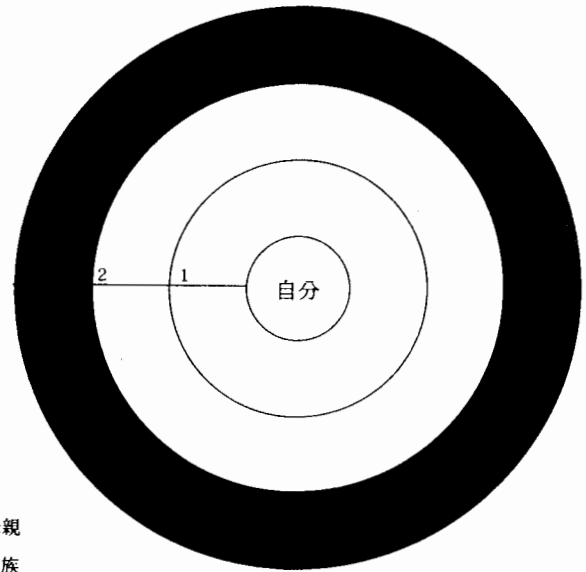
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間（先生）

家で遊んだり、砂場で遊んだりする場面では、「ひとりであそぶもん」病気の場面では、「ひとりで寝とれるもん」折り紙の場面では「ひとりで折れるもん」という、「ひとりで」が4度あった。

図9 愛情のネットワークのタイプ3-2

4タイプ

NO.213,217,229



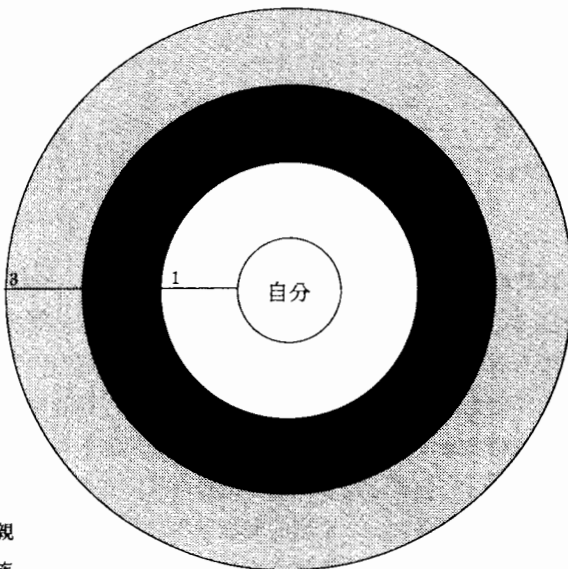
- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間（先生）

仲間を4度以上選択している。  
病気の時、母を選択していない。

図11 愛情のネットワークのタイプ4-2

4タイプ

NO.112,202,209,231



- 1.母親
- 2.家族
- 3.仲間（先生）

家族以外に人間関係が広がっている。  
母以外に父、祖父母、きょうだいを4度以上選択している。  
病気の時、母を選択していない。

図10 愛情のネットワークのタイプ4-1

にとっては見知らぬ人である筆者に対する態度、耳鼻科検診を受ける時の子どもの様子、先生に対する態度などの項目を設け、記録した。そこで性差、誕生月区分、きょうだい順位、再会直後の子どもの様子、見知らぬ人に対する子どもの態度、耳鼻科検診時の子どもの様子、先生との密着、分離不安のタイプと愛情のネットワークのタイプとの間の関係を表4～表11に示した。

表4に示すように、性差と愛情のネットワークタイプの間には関係が認められない。

表5に示すように、1年を3つの時期に分け、4月から7月に生まれた子ども、8月から11月に生まれた子ども、12月から翌3月に生まれた子どもに三分し、愛情のネットワークとの関係を調べたが、結果は有意ではなかった。

表4 性差と愛情のネットワークのタイプ（人）

|       | 家 族<br>母 型 | 仲 間<br>発展型 | 家族そ<br>の他型 | 仲間ドー<br>ナツ型 | Total |
|-------|------------|------------|------------|-------------|-------|
| 男子    | 6          | 15         | 2          | 4           | 27    |
| 女子    | 7          | 8          | 1          | 3           | 19    |
| Total | 13         | 23         | 3          | 7           | 46    |

$$\chi^2=1.33, df=3, n.s.$$

表5 誕生月区分と愛情のネットワークのタイプ (人)

| 誕生月   | 家族母型 | 仲間発展型 | 家族その他型 | 仲間ドーナツ型 | Total |
|-------|------|-------|--------|---------|-------|
| 4-7   | 2    | 9     | 2      | 3       | 16    |
| 8-11  | 3    | 9     | 1      | 2       | 15    |
| 12-3  | 8    | 5     | 0      | 2       | 15    |
| Total | 13   | 23    | 3      | 7       | 46    |

$$\chi^2=8.42, df=6, n.s.$$

次にきょうだい順位を検討する。ここでは男子女子を問わず年齢の上下関係を表すために、以下ではひらがなで「きょうだい」と表現する。きょうだい構成において、その子どもが長子、中間子、末子のいずれかを決定し、愛情のネットワークのタイプとの関係を求めた。

表6 きょうだい順位と愛情のネットワークのタイプ (人)

|       | 家族母型 | 仲間発展型 | 家族その他型 | 仲間ドーナツ型 | Total |
|-------|------|-------|--------|---------|-------|
| 最長子   | 3    | 10    | 1      | 5       | 19    |
| 中間子   | 3    | 2     | 0      | 0       | 5     |
| 末子    | 7    | 11    | 2      | 2       | 22    |
| Total | 13   | 23    | 3      | 7       | 46    |

$$\chi^2=6.49, df=6, n.s.$$

表6に示すとおり、両者の関係は有意ではなかった。

母親が幼稚園に子どもを迎えに来たときの子どもの様子を観察した結果を3つに分類した。一つ目は、母親を喜んで迎え、幼稚園での出来事を話したり、うれしそうに手をつないだりするグループ、二つ目は、母親のところに行き手をつないだりするが、積極的に話しかけたりすることがないグループ、三つ目は、母親ので迎えに対して表情がなかったり、母親を避けたりするグループである。そしてこれは、入園当初の慣れないことからくるお迎え時の混乱が収まった5月に観察を行った。愛情のネットワークのタイプとの関連を表7に示した。有意な関係を認めることができた。仲間ドーナツ型は母親と再会しても無表情な子どもが多いのが特徴的である。

本研究の場合、観察者自身は子ども達にとっては、自分達の世話をしたり遊んだりするが、当初は見知らぬ人であったと思われる。したがって観察者(天野)は、「見知らぬ人が週2回接した場合その人に対する子ども達の不安がどのようなものであるか」という点も観察したことになる。

表7 再開直後の子どもの様子と愛情のネットワークのタイプ (人)

|       | 家族母型 | 仲間発展型 | 家族その他型 | 仲間ドーナツ型 | Total |
|-------|------|-------|--------|---------|-------|
| 喜ぶ    | 2    | 9     | 0      | 1       | 14    |
| 中間    | 9    | 13    | 1      | 1       | 17    |
| 無表情   | 2    | 1     | 2      | 5       | 15    |
| Total | 13   | 23    | 3      | 7       | 46    |

$$\chi^2=20.35, df=6, p<.01$$

そこで入園直後の4月に時点において、子ども達が観察者に対して示した態度をまとめて分類した。そして積極的に観察者に話しかけてきたり、関わってきた子どもを親密群、自分から関わってくることはしないが、観察者が働きかけたことに関しては応じた子どもを中間群、観察者が働きかけようとするのを避けたり、観察者と目を合わさないようにした子どもを疎遠群とした。表8に示すように、各群と愛情のネットワークのタイプとの関係は認められなかった。

表8 見知らぬ人に対する子どもの態度と愛情のネットワークのタイプ (人)

|       | 家族母型 | 仲間発展型 | 家族その他型 | 仲間ドーナツ型 | Total |
|-------|------|-------|--------|---------|-------|
| 親密    | 1    | 11    | 0      | 2       | 14    |
| 中間    | 8    | 5     | 1      | 3       | 17    |
| 疎遠    | 4    | 7     | 2      | 2       | 15    |
| Total | 13   | 23    | 3      | 7       | 46    |

$$\chi^2=10.21, df=6, n.s.$$

B幼稚園においては耳鼻科検診が実施された。幼稚園でお医者さんに耳や鼻を診てもらうことに対して、事前に先生から説明があったにもかかわらず、子ども達の中には大きな不安を示した子ども達がいた。そこで、自分達の教室から保健室まで並んで歩いていく途中で、泣きわめいて進めなくなってしまうたり、逃げ出したり、先生に泣いてしがみついたりといった情緒的混乱を示した子どもを混乱有群、混乱を示さず耳鼻科検診を終えた子どもを混乱無群とした。そして愛情のネットワークのタイプとの関係を表9に示したが、両者の間に有意な関係はなかった。

多くの子ども達は、ふと母親を思い出したり、友達とのトラブルに対処できなかったり、けがをすると、先生を幼稚園での安全基地であるかのように頼り、何かを訴えたり、時には、言葉もなく抱きついたりする。しかし、そういつ

表9 耳鼻科検診時の子どもの行動と愛情のネットワークのタイプ(人)

| 混乱<br>有無 | 家族<br>母型 | 仲間<br>発展型 | 家族そ<br>の他型 | 仲間ドー<br>ナツ型 | Total |
|----------|----------|-----------|------------|-------------|-------|
| 無        | 4        | 5         | 2          | 3           | 14    |
| 有        | 5        | 8         | 0          | 3           | 16    |
| Total    | 9        | 13        | 2          | 6           | 30    |

$$\chi^2=2.68, df=3, n.s.$$

表10 先生との密着と愛情のネットワークのタイプ(人)

| 密着<br>有無 | 家族<br>母型 | 仲間<br>発展型 | 家族そ<br>の他型 | 仲間ドー<br>ナツ型 | Total |
|----------|----------|-----------|------------|-------------|-------|
| 無        | 12       | 20        | 3          | 3           | 38    |
| 有        | 1        | 3         | 0          | 4           | 8     |
| Total    | 13       | 23        | 3          | 7           | 46    |

$$\chi^2=9.48, df=3, p<.05$$

た一時的な先生との触れ合いではなく、継続的に教師に接触している子ども達がいる。登園後母親と別れた後、ずっと先生の後追いをしていたり、絶えず先生と手をつないでいないと不安でたまらない子ども達を教師密着群、そのような状態にはならない子ども達を教師密着無群と呼ぶ。表10に示すように、先生との密着の有無と愛情のネットワークのタイプとの間には有意差が認められた。仲間ドーナツ型の子どもの教師に密着するタイプが多かった。

我々(天野・宮本, 1998)は、毎日の子どもと母親との分離不安の状態を観察した。そして、4月から7月における母親との分離状態において、分離不安の表れなかった子どもたち、4月においてのみ分離不安の表れた子ども達、7月の時点では分離不安が解消したが、そこに至るまでにかなり強く分離不安を起こした子ども達、7月に分離不安が表れている子ども達というふうに不安の強さの段階別に分類した。そして、分離不安の表れなかった子どものグループを分離不安低群、7月に分離不安が表れている子どものグループを分離不安高群と呼んだ。表11に示すように、それらと愛情のネットワークのタイプとの間に関係を見出すことはできなかった。

表4から表11より性差、誕生月区分、きょうだい順位と愛情のネットワーク・タイプの間には有意差は見られなかった。また見知らぬ人(表8)、耳鼻科検診時(表9)、分離不安のタイプ(表11)と愛情のネットワークタイプの間にも有意差は見られなかった。再会直後の子どもの様子(表

表11 分離不安と愛情のネットワークのタイプ(人)

| 分離<br>不安 | 家族<br>母型 | 仲間<br>発展型 | 家族そ<br>の他型 | 仲間ドー<br>ナツ型 | Total |
|----------|----------|-----------|------------|-------------|-------|
| 低        | 4        | 11        | 2          | 2           | 19    |
| 中        | 5        | 7         | 0          | 1           | 13    |
| 強        | 2        | 3         | 1          | 3           | 9     |
| 最強       | 2        | 2         | 0          | 1           | 5     |
| Total    | 13       | 23        | 3          | 7           | 46    |

$$\chi^2=6.76, df=9, n.s.$$

7)と先生との密着(表10)が、愛情のネットワークのタイプと有意差が見られた。

## 考 察

表4より性差と愛情のネットワークのタイプには、有意差が見られなかった。高橋(1978)も性差と愛情のネットワークの関連については報告していないので、愛情のネットワークの形成には、性差という要素は関連がないものと思われる。

表5より、誕生月区分と愛情のネットワークのタイプには、有意差が見られなかった。しかしタイプ1において12, 1, 2, 3月生の比率が高かった。遅生まれの子どもは、体格や知的能力、認知能力の発達において、早く生まれた子どもに比べると未発達な面もある。したがって、まだ、仲間にまで愛着の対象を拡げる段階になく、母親を中心としたネットワークにとどまっているのかもしれないと推測する。

表6よりきょうだい順位と愛情のネットワークタイプの間にも有意差は見られなかった。しかし、タイプ1では、末子の方が最長子より比率が高かった。したがって、末子の方が母親を独占し、母親をネットワークの焦点に置きやすく、最長子は弟妹の存在から、母親以外にも愛情の対象を求めざるを得ないのではないだろうか。同様なことがタイプ4にもいえ、タイプ4では、末子より最長子の占める割合が高い。最長子は、弟妹によって、母親に対してその存在が薄くなり、母親とのコミュニケーションが少なくなるために、愛着の対象としての母親が抜け落ちてしまったのではないだろうかと推測する。

表7より再会直後の子どもの様子と愛着のネットワークタイプの間には、有意差が見られた。Ainsworth(1983)は、Strange Situation法における乳児の再会行動は、愛着の内的ワーキング・モデルを反映していると言っている。同様にMain, Kaplan & Cassidy(1985)は、実験室での

短期分離であろうと、入院のような長期分離であろうと、親との再開時の反応は、その子どもの内的ワーキング・モデルのよき指標であることを指摘している。タイプ4の子ども達には、ネットワークの中に母親はいない。したがって、彼らには、母親に関する健全な愛着の内的ワーキング・モデルが存在するとは予測しづらいので、再会行動が無表情なものになるのは当然であろう。タイプ1、タイプ2の場合、再会行動が無表情である比率が小さいことも、Ainsworth (1983) の理論を支持するものであろう。

表8より見知らぬ人と愛情のネットワークには、有意差が見られなかった。しかし見知らぬ人に対して親密であるという比率が、タイプ1では低かった。タイプ1には、家族以外に人間関係が拡がりにくい要因があるのかもしれない。またネットワークの焦点に母親がいるからといって、母親を安全基地にして探索行動ができ、見知らぬ人とも関わっていくという Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) の図式が、乳児期には成り立っても、生後3年を経た幼児期において単純には成り立たないと考えられる。この要因を探っていくことは、今後の課題であろう。

表9より、耳鼻科検診時の子どもの様子と愛情のネットワークのタイプには、有意差が見られず意味のある情報は得られなかった。

表10より先生への密着と愛情のネットワークタイプの間には、有意差が見られた。タイプ4においては先生に密着する比率が高かった。タイプ4の子ども達は、母親を安全基地にすることができないので、幼稚園での探索や、友達との関わりを安定して行うことができない。したがって、先生との密着で身の安全を守り、安心感を得なければならなかったのだらう。タイプ4で先生に密着していた4名(112児, 209児, 213児, 229児)は、困ったときに先生を安全基地にするという先生との接し方ではなく、先生の後追いをし、絶えず先生と体が触れ合っていないと落ち着かない様子であった。しかし、先生と活発に言葉を交わすということとはなかった。つまり、彼らの先生との接し方は、先生と距離を置いて会話をしたりほほえみを交わし合ったりするというものではなく、絶えず先生と自分の体の接触を維持するという行動に終始していた。またタイプ1では、先生と密着する比率が低かった。このことは、タイプ1と見知らぬ人の関係に類似している。タイプ1にとっては、先生も見知らぬ人同様にそのネットワークの外に置かれているのだらう。

表11より、分離不安のタイプと愛情のネットワークのタイプには、有意差が見られなかった。分離不安のタイプでは、Strange Situation の A タイプが、健全な愛着行動する子ども達とともに分離不安低群に含まれてしまうのに対

して、愛情のネットワークではその焦点に母親がいない3, 4タイプと判定される。そして Strange Situation での C タイプは、母親を健全な愛着対象としている子ども達とともに愛情のネットワークの1, 2タイプの中にも含まれる。母親との再会行動と愛情のネットワークのタイプ、先生との密着と愛情のネットワークのタイプとの間に関連があったのだから、分離不安のタイプと愛情のネットワークのタイプとの間にも何らかの関係が見出せると考えられるのだが、結果は関連性がなかった。いろいろな要因が介入していると考えられるので、その要因を明らかにし、整理していくことは今後の課題であらう。

## 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Lawrence Erlbaum.
- Ainsworth, M. D. S. 1983 Infant attachment and maternal care: Some implication for psychoanalytic concept of development. *Dialogue*, 6, pp.41-49.
- 天野菜穂子・宮本正一 1998 三歳児の幼稚園入園時の分離不安 岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学), 47, 199-206.
- ボウルビィ, J. 1982 黒田実郎・大羽 S・岡田洋子 (訳) 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版 (Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*, Vol.1, Attachment. Basic)
- ボウルビィ, J. 1993 二木武監訳 母と子のアタッチメントー心の安全基地 医歯薬出版 (Bowlby, J. 1988 *A secure base; Parent-child attachment and healthy human development*. Basic)
- Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J. 1985 Security in infancy, childhood and adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing Points of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50 (1-2), Serial No.209.
- 高橋 恵子 1973 女子青年における依存の発達 児童心理学の進歩 pp.256-275 金子書房
- 高橋 恵子 1978 幼児の愛着の測定 日本心理学会第42回発表論文集 pp.940-941.
- 高橋 恵子 1983 児童心理学ハンドブック 第23章 対人関係 pp.607-639 金子書房
- 高橋 恵子 1990 生涯発達の心理学 岩波書店
- 高橋 恵子 1995 自立への旅立ち 岩波書店
- 謝辞 本研究の実施にあたり、高橋恵子先生 (聖心女子大学教授) には PAT の図版を提供していただきました。ここに記して感謝の意を表します。